

MBAを取得し、経営コンサルタントに。元フジTVアナのニューヨーク留学生活

女三十歳、ひとり海を渡る

坂野尚子

MBAを取得し、経営コンサルタントに。

女三十歳、

坂野尚子

ひとり海を渡る

元フジTVアナのニューヨーク留学生活



著者／坂野尚子（ばんのなおこ）

発行／一九九〇年三月三〇日

発行者／筒井興一

発行所／株式会社 あき書房

豊島区東池袋 4・13・8・201

電話〇三（九八八）七二二八

印刷所／株式会社 総合企画

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本はご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

¥1200

©Naoko Banno 1990, Printed in Japan

ISBN-4-900428-22-1 C2037 P1200E

女三十歳、ひとり海を渡る

目次

●はじめに	4
1 留学を決める	7
2 留学準備	25
3 留学本番	43
4 クラスと教授——春学期	53
5 コロンビアの輪と和——夏学期	75
6 たまらなくニューヨーク——秋学期	95
7 いよいよ就職いよいよ卒業。再び春学期	127
8 フィニッシュは、結婚！	149

●留学を目指しているあなたへ 158

●それぞれの留学 164

中川一郎（一九八九年コロンビアMBA）

●HOW TO 留学のTIPS 180

古賀幸博（ファースト・アンド・カンパニー教務課長）

装画／佐々木悟郎

本文カット／関本幸乃

装幀／上野和子

はじめに

慌ただしい月日であった。

コロンビア・ビジネス・スクールでの最後の期末試験（ファイナル）を終え、ニューヨークでも自由な宗教活動の拠点として、また、中のステンドグラスの見事さと厳肅なパイプオルガンの美しい響きで有名なリバー・サイド教会で結婚すると同時に、コロンビアを卒業。そして、引越して、帰国、自身の再就職、家探しと人生でもこれほどドラマチックな時は恐らくもうないだろうと思う。留学生活の終わりは、そのように考える暇もなく過ぎ、帰国後、新しく、マネージメント・コンサルティング会社に経営コンサルタントとして勤めることになった。

経営コンサルタントという仕事は、日本では、マッキンゼーの大前研一さんにより多少有名になったとはいえ、まだまだ知られていないが、アメリカではビジネス・スクールの卒業生の就職先として圧倒的に人気がある。投資銀行（インヴェストメント・バンク）と人気を二分する程やりがいがあり、しかも高給である。起業家精神の旺盛なアメリカでは、コンサルタントから、スモール・ビジネスへと考えるMBA（経営学修士）も多い。また、

これらプロフェッショナルと呼ばれる仕事は、少なくとも、表だつたところで性差別をされることはありえない(アメリカでも性差別は存在する)。しかし、日本では、女性のコンサルタントはまだまだ少なく、そもそも経営コンサルティングといつても、一体何をやるのかさっぱり理解されていない部分もあるようだ。

就職が決まって数日後、私は、家探しに行きながら、自分の仕事を言つても相手にされず、「ご主人の仕事は？」と、夫の仕事を聞かれるという目にもあつたし、久し振りに会つた知人からも「フジテレビを辞めたのはもったいなかった」と、二年前と同じような台詞を聞かせられたりもした。そのままフジテレビにいるよりも少なからず昇給し、やりがいを感じている私は、何だか、奇妙な気分であつた。と同時に、日本では、まだまだ名前の通っている会社、つまり、大企業主義が浸透しているのだなとも思った。また、MBAといつても、日本では一般に通用しないと改めて感じ、「早くお子さんを」と言われるたびに苦笑した。

今回、日本に帰つてきて思つたことは、ニューヨークについての情報量の多さである。そして、近年、私のようなOL留学や、転職というのが、非常に多いことが、各月刊誌や、週刊誌からもうかがわれる。「OL留学症候群」という言い方すらされている。この本は、そのような方に少しでも参考になればうれいと思う。決して、留学というのは、格好のいい面だけではないし、ましてこの本は、サクセス・ストーリーでもなければ、よくある

「〇〇のニューヨーク」という何故かアメリカ人以外とは隔絶した生活を送っていたかのよう
に、アメリカ人のことしか出てこない本でもない。私自身のふだんの生活、そして、自
己嫌悪の連続でもあった毎日を綴った本である。

一九九〇年・東京にて

坂野尚子^{ばんの}（旧姓 土井尚子）

留学を決める

1



女二十九歳、一人日本に帰って

狭い通りの両側に、所狭しと、並べられた商品。カラフルで、でかでかとした看板。ザワーツとした音の中で、日本を感じる。自分が生まれ育った国、日本をたかだか三年半しか離れていないというのに、何だかヨソ者の気分だ。私にとって、私鉄沿線に必ずある、この手の商店街ほど日本を象徴するものはない。

八十七年春、同じように私は、この商店街を歩いていた。その日、私はアメリカのビジネス・スクールに留学する準備をすべく、七年間勤めたフジテレビジョンを退社。特派員として二年間過ごしたニューヨークに思いを抱き、この通りを歩いていたのだった。地下一階の小さな会議室でアナウンス部の皆に最後の挨拶をした私は、手に後輩から贈られた赤いバラの花束を持ち、一人行進するかのように、歩いた。三月の終わり、町は、まだまだ寒かったが、私の気持ちは、高ぶっていた。ニューヨークに帰りたい、また、あの町で自分を試してみたい。極めて日本的な光景のもと、私は数日前までいたニューヨークのことを考え、長年勤めた会社を辞めるというセンチメンタルな気分の中、勇気を奮い立たせ

ていたのかもしれない。

アナウンサーとして過ごした日々は全く未練がなかったと言ったら、嘘があるが、私は、人生は前にだけ進むものと、かなり割り切っていた。そして、既に気持ちとは別の新しい人生に向かっていた。人生は一回しかない。やりたいと思ったことは、何でもやり遂げたい。これは、私がいつも思うことである。自分自身の人生設計を考える上で、二十代は、好きなことをやり、三十代は、次のステップへの修業をし、四十代では、自分の会社を持ちたい。そして、五十代は人のためになることをしていきたい。これが、私の、私自身の人生への青写真である。というよりも、夢と言った方がいいのかもしれない。好奇心の旺盛な私は、何から何まで自分の興味のあることには、手を出したくなってしまう。全く欲張りだと思うのだが。そして当時、アナウンサーとしての仕事は、私にとっては既に終わりである、自分自身の中で、終止符をうっていたところがあった。もちろん、私が、誰もが惜しむようなニュース・キャスターであつたら、話は別であつたろうが、私は次第に単なるアナウンサーやレポーターでなく、できれば、逆にインタビュされるような人になりたいと思うようになっていた。

私は、人生の計画をたてることが好きだ。この年代ではこれをし、この年代ではこれと、人生の設計をたてているのが常である。

幸運なことに、夢といっても、計画の80%位は、いつも自分の思い通りになってきたよ

うな気がする。そう、一番大切なのは、自分には、これができる、やることができるのだ、
と言ひ聞かせることのようなだ。どのような人だって、自信が100%あるという人は、ま
ず、いないのだから。

●スモール・ビジネス

主に自営業で、起業家の起こした決して大きくはないが、夢の感じられる事業。言葉どおりにとってしま
うと、ちょっと、つまらない。

アナウンサーに別れを告げる

フジテレビの女性特派員三代目としてニューヨークに行く前までの私は、女性アナウンサーお決まりの登竜門である、天気予報、朝のニュース、番組紹介から始まり、主にワイドショーや、ニュースの突貫レポーターとして仕事をしていた。入社した頃は、女性のみならず、アナウンサーの活動領域が狭い頃で、先輩達も、一部の人を除いて、皆アナウンサーでお茶を飲んで暇をつぶしていることの方が多かった。その後、一、二年の内に、アナウンサーを、特に、女性を起用しようという気運が高まってきて、私自身も色々とやらせてもらえるようになった。政治家のインタビュウから、芸能人がやれ映画の撮影に入ったりとか、有名人のパーティー・フアッションだとか、はたまた、北で、地震あり、南で、台風が来襲、西で、誘拐あり、東で、刀傷沙汰ありと、休む暇なく走り廻っていた。国内のみならず、パキスタン、シンガポール、スペイン、ハワイと月に二十日以上出張ということも度々だった。ふつうの女の子の生活とは程遠く、一見派手には見えても、体力が勝負。休日返上、友人との約束もできにくい、仕事一筋の五年ではあった。が、中学時

代から夢にまでみた仕事だったし、また、お給料の点からも、二十代の女の子の虚栄心をくすぐるには十分な仕事だった。

一度、これこそやってみたいと思っていた番組、『なるほど・ザ・ワールド』につくという話があり、100%決まったと当時の部長から辞令を受けながら、お蔵入り。会社は、個人の希望や、一アナウンサーの人生なんて、考えないのだと、つくづく思ったが、考えてみれば、これは、どこの世界にも転がっている話であろう。当時副部長であった上司、露木茂アナウンサーが、「出ると叩かれるのがこの世界だよな」とおっしゃって慰めてくださった言葉が今でも頭に焼きついている。しかし、この時この番組についていけば、ニューヨークには行かなかったであろうし、多分、フジテレビを辞めることもなく、五十五歳の定年まで勤めていただろう。もちろん、MBA（大学院の経営修士課程）を取ることもなかっただろうと考えると運命の不思議さを感じる。

八十五年三月、学生時代にウディ・アレンの『マンハッタン』を見てから、いつか住みたいと思い続けていた憧れのニューヨークに赴任が決まった。一度観光で訪れたことはあるが、何といっても住むというのは、話が違う。殺されるとか、襲われるとか、治安が悪いということを、耳にタコができるほど聞かされたが、私は、何かが起こりそうなこの町に胸を弾ませ、「女27歳、一人海を渡ります」という挨拶状を送って、日本を離れた。

それからの二年間は、まさにアップテンポに過ぎていった。ニューヨーク特派員として

の毎日は、隔週、月曜から金曜までは朝五時起き、午前七時から九時まで、現地日本人向けの日本語放送のキャスターとしての仕事があり、その後深夜まで、日本向けのニュースの取材という日もあった。しかし、日本でのアナウンサー時代と違い、取材のセッティングから、編集までかなりの部分を任せられていたので、大変やりがいがあった。おもしろくもあった。そして、たまの休みには、ヴィレッジから、ソーホー、セントラルパークと歩き廻り、見ただけだけミュージカルや映画を見、聞きたいだけジャズを聞いた。

そのような生活の中で、私は、今まで何も不思議に思わなかったことに、一つ一つ疑問を感じ始めていった。それは、アメリカにいて、日本自体を、そして、会社自体を客観視できたからだと思う。確かに、アナウンサーやレポーターとしての仕事は、やりがいがある。一つの事件を追いかけていく間は、時々背中がぞくつとするほどの感動を覚えたり、ふつうに生活していたら一生会えないような人、例えば竹下元総理を始めとする政治家、ロバート・レッドフォードのような外国の俳優とも話ができた。しかも若い女の子の憧れの仕事としてばかりでなく、テレビに出るということは、結構お固い仕事をしている人からも、ホホーっと言われるところがあって、それが快感でもあった。しかし、それは自分がただの女の子であることを忘れ、ふつうの女の子ではないという、変な自尊心や傲慢さにもつながっていた。

しかも、毎日、今日は、お葬式、明日は、結婚式という気分の変換が必要で、それは、

ともすると自分自身の感性を麻痺させるような気もした。七年もの間同じ仕事をしていると、この仕事はこう味つけをすればいいとか、これはこうと、わかってくるところがある。そうすると、材料は違っても、味つけの方法は、同じである。人が一生かかって歩んでいく中で、皆、一つ位は、忘れられない思い出があるはずである。そのような人生のドラマに接する機会がありながら、このように簡単に味つけすべきでないのでは、とも思った。また、浅く広くテレビ感覚に、いつの間にか押し流され、物事を深く考える代わりに、とにかく早くやらねば、と思うようになってしまっている自分が恐くなった。

もちろん、テレビ界でも深く感動的な作品作りを目指している方は大勢いるし、私のような、たかが七年のキャリアでもものを言うことはできない。が、視聴率戦争の中で、日本のテレビ界は、安易に数字のとれる、軽ちゃーっぱい、若者志向の作品が、主流をとっているのは、事実である。また、どのような仕事でもサラリーマンの常なのかもしれないが、テレビの世界にいと日常の業務を遂行するだけで、神経の一つ一つまで、消耗していく気がした。特に、常に一刻も早くと時間に追われる仕事であつたからかもしれないが……。そのような中で、私は、自身を振り返って反省すると共に、あの日本のテレビの混沌とした世界に再び戻ることが、恐くなり始めていた。特に、アナウンス部というところは、男も女も芸者の置屋的なところが多分にあり、一期ごとに三カ月ごとに、次はどの番組につくとか、何の番組のレギュラーになるとか、はたまた、自分より若手があの番組につ